

旧リンガー住宅

19世紀中頃、長崎は事業を目論む外国人が富を築くことができる場所だった。1859年に外国との貿易のために開港された日本の3港のうち、長崎は隆盛を誇っていた世界の紅茶貿易の玄関口であり、活気にあふれていた上海の港に最も近い位置にあった。フレデリック・リンガー（1838-1907）は、トーマス・グラバー（1838-1911）によって中国から長崎にグラバー商会の茶葉貿易を監督するために招かれたとき、約10年間の経験と功績を持った茶葉検査官であった。3年後、フレデリック・リンガーはエドワード・ホーム（1836-1909）とともに自身のビジネスであるホーム・リンガー商会を立ち上げ、グラバー商会の茶葉貿易を引き継いだ。フレデリック・リンガーは保険・海運会社の代理店、英字新聞刊行、ホテル経営、領事業務も行い、長崎において大きな成功を収めた。住宅は1868年に建てられ、その6年後にフレデリック・リンガーがこれを取得した。

フレデリック・リンガーは1883年にこの住宅に移り住み、1907年のイングランドへの旅行中に死去するまでここで暮らした。フレデリック・リンガーの次男シドニー・リンガー（1891-1967）は彼の家族とともにこの住宅に移り住み、第2次世界大戦の頃の期間を除いて、1965年に長崎市に住宅を売却するまでここで暮らした。

1966年、住宅は日本政府によって国の重要文化財に指定され、1973年には元の姿に復元された。

建築の特徴

リンガー住宅は1階建ての平屋建て住宅で、イギリス植民地時代のインド由来のスタイルである。枠組みは木造で、外壁は天草の砂岩でできている。屋根は瓦で覆われ、ベランダは、ロシアのウラジオストクから運んだ御影石を床に敷く。住宅は、冬には石炭をくべる暖炉によって暖かく保たれ、夏には高い天井と大きな窓によって涼しさが保たれる。1800年代に建てられた多くの平屋建て住宅のように、正面出入口は左右に部屋が配置された廊下につながっている。厨房とメイド部屋が附属する。